

アラン

ガブリエル詩集
(下)

高村昌憲訳

思い出

三月のソネット

思い出

夢

春

あなたの朝のために

四季

失われた春

月への夢想

ポートルランドの海に

雷雨

記念日

香水

ヴィーナスへ

メーヌ地方の森から

秋の頃

一年

繊細な抒情詩

『海辺の会談』への献辞

抒情詩

悲しみを見つめて

ソネット

何故かをあなたは知っている

亡霊

鏡

夜

『思想』のための献辞

あなたのお祝いのために

夢

六月の夢

夏の日

未来への思い出

『教育についてのプロポ』のための献辞

アランとガブリエルの年譜

訳者あとがき

思い出

あちらこちらに生える松の木と荒野の彼方に
私には大空に愛される前兆が見えていた
惜しげもなく撒かれた澄んだ水と光
樹木も収穫物もなく広大な広がり
この小丘は傾いている 広々とした雲は
浜辺のふわふわとした波を現しており
金色の海岸線には美しい銀色の縁
崇められた約束と沈黙と孤独
私の待ち切れない心が生んだ幻想

しかしながら私はあなたの笑い顔を探した
それは私が期待したことであり 私の思想の続き
やっと波間に鷗が何羽も見える時
この柔らかな大海原を前にして疑う
一瞬のイマージュの結び目を解きながら
もしもそれが翼の白さとか泡の白さであったなら
一つの動きにも私が見ていたものは
輝いている霧 きらきらと光が反射する海
ゆったりとまどろむ波と飛んでいるような蜃気楼
力強い波の将来を予言しながら そして
繋がれている小船は小刻みに震えている
何本もの松を愛撫する水の鏡になったあなた
おゝ私の渴きよ 塩分よ！ 私の饗宴の〈女王〉
私の涙と喜びの泉でできているのは大洋.....

そんな風にあなたは絹糸のようなおかつぱ頭で私を見る

(ガブリエルへ 一九三〇年三月一七日)

三月のソネット

太陽は毎日昇ってきて 年は回る
もっと早く もっと長い日を見付けながら
金色の縁飾りで小枝が飾られて
遠くの霧が輪郭を震わせている

それは笑っている春 希望 愛
それは下を向く人々に冠を被せている花
それは新年のお祝いを歌っている歌
それは永遠の陶酔と永遠の繰り返し

あなたの春 私の花よ！ あなたの眼は清純な泉
新鮮な自然が眩んでいる水の流れ
悲しいかな！ 映しているのは他所の木々と大空

よそ者の視線には新しい曙の感動がある！
私の心よ 期待の中で眠れ 両眼を閉じよ
過ぎた春に向って 何故ならまだ冬だから

(ガブリエルへ 一九三〇年三月二四日)

思い出

皆が歌い 皆が生まれ変わる リラの花は咲く
そしてざらざらとした冬がついに終わりになる
もう緑色の葉のざわめきは黒い墓石を隠し
希望は翔び 鳩が囁いているのを私は聞く
爽やかな朝の小鳥はシャンソンを思い出す
小鳥のさえずりが泉に答えている
次の祭に向い 上手に編んだような巣に向って
あなたには家の壁に映った飛ぶ鳥の影が見えるの？
皆は思い出す 皆は何も忘れていないと言う
今では小低木の上に広がった周縁が
新鮮な緑色の葉と繊細な葉脈を広げている
季節に忠実な蕾には同じ花々が眠り
昔からの香気と 昔と同じ色彩が眠り
幸せの花飾りと一杯になった籠が眠る

そんな風に苦しかった長い冬が過ぎて
私の心と夢はそれ自身の上に撓んで眠り
思い出を目覚めさせて 急いでいる波を感じ
高速の帆船のように運んでいくのは愛の波
何もかもが新鮮に映るあなたのイマージュ
涙が拭われたように 崇められているあなたの微笑み
そして私には二つの美しい花のようなあなたの両眼

(ガブリエルへ 一九三〇年四月七日)

夢

物思いに耽ったような波と楡と蒸気で煙る夜
その視線は愛された体の上で活気を失い
霧が立ちこめて物の輪郭を濡らす
大気は詩をつぶやき 周囲には
松の木の甘い揺り籠と謎の不穏なざわめき
絹のような愛撫がリズムをつけて髪を伸ばす

私たちは何処にいるの？

あなたの手はそっと私に話しかける

従順でしなやかで元気そうな肩の上に
止まっている鳥のように そして大変に軽そうに
草よりも重そうなのは薔薇色の水滴

夕闇の陰が長くなって 道を遮断する
そして私たちの思い出と明日の処女を遮断する
金色の小道のように真新しい線が続き
蒼い夕暮れが小湾の上にデッサンの線を描く
大空は震えて 私たちの足元の明かりを消す
水平線の中に 大変に長い間監視されて
心から期待した多くの希望によって
私たちはあなたから奪い去った二隻の船と
あなたが両眼を涙した遠い地方を見たと信じる
しかし掠めるだけの私たちの愛する幸せは
翼の影を映したように見える波が震えるように
忠実な鳥のように柔らかな巣に戻る
私たちの過去の愛は 私たちの未来の全てであり
来ようとしなない幸福な日の中におさまっている

権力という幻影よ おゝ下降する道よ！
大きな危険と眩暈 そしてそれはダンテの地獄
私たちの陶酔が流れ その人の上にある螺旋は
思ったよりも何時も落下しているのである

すべてが正しい 高慢の心は虚しいと知りながら
拷問を選択した 何故なら欲望は
あの世の見知らぬ空虚な所で起きねばならない
もしも永遠の詩に黄金の枝がなく
緊張したヴィルギウスが足元を注意しなかったなら
怒りに対して薄荷や芥子や蜂蜜の食事を
寧猛な動物に投げつけることがなかったなら
間違いの次には苦しみがあり 同じ軽率さによっても
掘った淵からは何も戻ってこないだろう

絶望した魂が根付く眠り
この恐ろしい遊びの八分音符の音にとりつかれた魂
疲れを知らない火照りと闘う優しい歌い手
自分たちの武器を自分の上で振り回す熱狂は
優しさという波と涙という泉から生まれる

私たちの間に滑り込む極めて薄いカーテンのように
突然の新鮮な風が私たちの膝を愛撫している
小さな部落のランプが一つ 位相のように燃えている
怯える雌牛の走っている音が聞こえている
夜の中でぶつぶつ言う声が消えている
大空の下で全てが沈黙し ゆったりとした波の
銀色の海岸の音の外には何も聞こえない

まるで幸福な時間の軽やかな歩みのように

(ガブリエルへ 一九三〇年四月一六日)

春

おゝ色彩に溢れ 香りのよい薔薇色の朝よ！
和らいだ私の魂に幸福を知らせよ！
おゝ春よ それは嘗てなかった程に笑うあなた
私が愛したのから別れさせるのはあなた
あゝ！ 私は何時も致命傷のように感じる
巨大な自然に私の苦しみは何を持ち込むの？
それは回転しているがよく忘れ 花々を蒔く
そして暖かい霧の中で私は涙を乾かす
記憶もなく 季節によって生き返る幸せ
新しいパレットは訳の分からない本を消し
私がそこに書いたのは私の日常と辛い思想
私の心の亡命地と広々とした海原
そして観念が掘り下げている深い淵

おゝ大変に長くとりつかれた美人たちの後悔よ！
嫌疑をかけられた責苦は不幸という陶醉
単調な未来と間隔を置いた苦痛
心の冬と雪と悲嘆に暮れた氷.....
しかし痛みは軽くなり 空を飛んでいるようだ
私がもう信じないのは 既に蒼白い思い出

全ては美しく純粹だ 心には引潮がある
緑の草木よりも新鮮な希望が私に再生し
目覚めた梢から 深みのある金髪の人々に
縁飾りのような青い雲が生まれている
その場所は感嘆させた私の両眼をうっとりさせる

—しかし あなたの過去の苦しみを洗い落としたのは誰か？

—あなたの思いを私に言ったのは勿忘草

あなたの朝のために

いとしい肩の上に私が長く口づけするのを感じるの？
感動した私の魂に思い出が蘇ってきて
私は夢見る…… そして迷った夜に私が再び見るのは
あなたの優しい額 眉 瞬く瞼
子供のように不満そうにしようとする唇
口づけの花は既に柔らかな頬のため
朝はこの鉄でできた項に眼を通し
あなたは海賊だ！ あなたは地獄の匂いを嗅ぎ
美食家のあなたの鼻孔を思い出させている
私は 海藻や海の岩場の草の匂いがする
太陽が成熟させていくあなたに近づく
愛らしいあなたの美しい首は揺れて微笑む
まるで樹木の節々に藤が巻き付くようにその時
私は根の上に根を張って再び関係を結び
美しい幹はそこから私たちのねじれた上半身を出していた
こんな風に熱心にこれらの良い香りを吸い込んで
狂ったような愛撫よりも更に生暖かい私たちの思い出は
黙認した様子で私たちの花冠を躊躇わせて
睫毛の下の私たちの両眼は閃光を交し合い
花々がお互いに愛し合うように私たちも愛し合うのを望んでいた

.....

海からの風はもつれ合う私たちの苦しみの使者
翼をつけた愛撫の目覚めを届ける

(ガブリエルへ 一九三〇年五月六日)

四季

軽い運動は自分を忘れさせてくれる
日々の時間が砂時計のように流れる
雛は巢で叫び 春には成長する
樹液は豊かにあり 葉を重くする
一輪の薔薇の花の良い香りが茂みに漂う
ナイチンゲールが直ぐに歌おうとしている
この水晶のような景色の隅に金色の雲が
よく響く歌声を震わせており
暗い樹木が夜そのものを映している

すべてのものが眠る 風は止み 葉の音もしない
美しい旋律の歌に目覚める 何という沈黙！
怠惰な大地は耳を立て そして目覚める
草はあらゆる活動の源になる穀物を育て
愛しい夜がそのかぐわしい香りを立てて
女性の髪の毛のような欲望に応えている

あなたは消えやすい炎が通ったように感じたの？
夏が陽気に前進し 裸足の両足を上げている

行け！ 日々は逃亡して決して戻らない
妖精の日々は踊る 異教徒の女たちの愛よ！

私があなたに奉納するのは

あなたが戻ってくるため

終りにしたくないのは幸福な金色のその日
私はそれを滑らせたまま 未来と呼んでいる
私の裸の夏はあなた 黒い船首が
玉虫色にきらきら光る果実のように割れるにしろ
あるいは青緑色の波のうねりと厳しい冬が
鋭い鋼鉄で緑色の海流を引き裂くにしろ
山頂の雪に似た海水の泡にしろ

あるいは水底の泥を大空へ昇らせるにしろ
それはあなた 私の美しい春！ 私の太陽？ あなたの髪
私の青い空？ それはあなたの両眼の静かな輝き
私のそよ風？ 私の両眼には大変に優しいあなたの息
私の秘密の小さな谷？ 細かな泡のあなたのくぼみ
金粉の上で一日が終るように そこに
あなたの香気に酔って赤くなった神が眠る

(ガブリエルへ 一九三〇年五月二〇日)

失われた春

あなたの両眼は私の夢が陥った明るい深淵
夢には夢で私の視線に報いている
あの世はそこに映るが決して入り込むことはない
それは身振りの一部 外の身振りが加わるのは
器用な両手の思い出によるもの
絹のように柔らかな布地で織られた襷によるもの
そしてあなたの言葉も正しく評価されて
教えられた話を全て関係のない世界の人に話し
その世界の装飾は空っぽであなたの魂はなく
旅行者となったあなたの魂は眼に見えずに存在する
私の両眼は 私が見る対象をとらえていない
あなたが昔のことを捜すようになると
私は過去に愛した私たちの道を再び通り
私の愛しい考えを 宝物となって集めている
巨大で明るい空虚が私の足の前に広がっている
私の精神は見えないものに注意深くなり
夢の空間にふわふわした塊のように漂う
稲妻のように砂浜の砂が現れてきて
あるいは現れるのは多分あなたの物思いに沈んだ額.....
荒野には日に焼けた黄金..... 果てしない大空の下の海
広大な海には短時間に直ぐに消える波
そこに突然と現れた波間にあなたの姿は消えていく

私に言え それは生きること？ 私たちは死んでいないの？
あの世のスチュクスの川から陰鬱な岸辺までを私たちに言うこと
それらの陰からあの世の陰のことを虚しく話しながら
思い出しかない崇められた幸福は
陰気な独白に似ていないのだろうか？

おゝ！ 生きること！ 生き生きとした未来の息を吸え
それらの指が伸びる方へ全てが香気に近づき
新しい未来に立ち上がり 花が咲き出すことを

両眼が思っている間に 両手が触れるのだ！
死んで生き返り 豊饒のものを手に入れるために
何時も張りつめた希望がそそり立っている
短時間のリラの花の後は薔薇の花の約束
そして百合の花が緑の葉によって聳えている
半分開いた愕を取り巻いているダイヤモンド
既に真珠色に輝く花冠が目覚めている
そして聖なる輪舞曲の中に季節が飛んでいる
私の両手の中にあるのは金色の果実で一杯の世界！

(ガブリエルへ 一九三〇年六月五日)

月への夢想

おゝ月よ 真珠色と薔薇色の優しい船
私の魂を癒してくれる神秘的な鏡
淡い夜に私の心もあなたのように昇っていく
あなたは止まって夢見る 私と一緒に
憂愁と優しい愛の約束をして駆け回る
沈黙している夢想家は慰められて待つ
あゝ鹿毛色の粉のような時間よ ここからは余りに遠い
その上更に遅くなれば あなたの視線も賛成するだろう

私が何時もの軌道に取り直した時
光の河の上に橋が架かっている
私がポプラの大木の下で後を追う時
一緒になったり離れたりする恋人同士は
仲直りと楽しい口喧嘩のイメージ
よく響く路地が突然に曲がると
大時計が明るい大空に現れるのを私は見る
同じ月が平原の空に浮かんでいる
私はゆっくりとした思考に戻るだろう
その道は私たちの抱き締めた姿を知っている
定刻になって眠るにも時々長い時間がかかり
眠るためには夜が終らないのを願うことだ
それは外の大通りを昇っていく月である
それは見知らぬ大地に近づいている夜である
物思いに耽った月が遠くの水平線で待つのは
広大な監獄の周りを回っている城壁と同じだ

「おゝ距離よ！ 非存在よ！ 物質でないことの障害よ！
明らかな深淵を私はあなたの魂の全てに突き刺した
あなたは何でもなく 私が保持したかったのは誓いだけ
私が戻ってくる時刻を待っているのも私
私だけの思考の虜になっているのも私だけ
あゝ！ 私の意志が沢山叶えられたただけだ

最もだ！ それは酷い間違いだった
運命よ 私はあなたに従うがあなたは私には残酷だ
あなたの打撃は恐ろしい正義を倍加した
おゝ！ 自分の拷問を選択することの苦い意志よ！
単にそこまでだ！ あなたはもう遠くへ行かない！

それは独りで調整するのを望むことであり そして
僅かな空間にも渦の全能とゆっくりとした潮の流れ
それはあなたが言ったこと 円を作って流れるように
その外のことはこれからのこと 既に済んだことでもある
原石の衝撃により広がっていく幾つもの波
無敵の法律によって事物は国家管理される
あなたは決心し望む 望むことをあなたは知っているの？
静かにせよ！ 自然はあなたの願いを叶える
それ以上だ 小石は転がり 雪崩は滑って進む
全てが関係しており 全てが実現されねばならない
あなたはそれを認めたくないが それを望んだのはあなただ
あなたが気に入ったことは美しい天使 気に入らなかったことは
並んで運命を大きくさせに出掛けること
こんな風にして毎日 毎月 毎年が回っている
おゝ月よ あなたは変わりながら顔を取り戻す
このようにしてこの世の事物や人間たちが行くのは
何時も無謀な望みに従って満足させられるもの
何時も次々に起こる必要性の連続に不愉快にさせられるもの」

こんな風にあなたの心は銀色の月に話し
大空で大変に蒼白く蝕んでいるオパール
既に美しい円盤は欠けていき 恋人の心の中に
日々のゆっくりとした労働が描かれており
決して戻らない無敵の時間が描かれている
しかし祈りが生まれて思考する「私はあなたを愛した
私はあなたを愛する 私はあなたを愛するだろう
邪魔をしている雲を貫いて平然と再び生まれる月のように
何時も同じで確かでその法則は変わらない」

ガブリエルよ 私はあなたを愛する あなたしか愛さない

(ガブリエルへ 一九三〇年六月一七日)

ポートルンドの海に

葡萄酒色の海は巻きつき 巻き戻る
波のうねりのスカーフを黒い岩に投げながら
変化する織物の糸を取り戻しながら
銀色の縁を作り直しては解体させる
波は轟き 眩き そして自らにぶつかる

長い夜の間 そのようにして私は愛する
私の疑問と幸せと過去と未来は
強固な絶壁で轟いて眩きながら
際限なく押し出された波に転がっている
あなたには殆ど如何でもよい愛だが私には気に入っている！

唯一の水平線から私にやって来るもの全てが
陰鬱な後悔 狂ったような希望 理性の光
全てが私には気に入り 全てが白いレースのための糸
そのことを私に話すなら 悲しみに祝福あれ
それらの言葉を通して 私が理解するものよ！

それと同じ法則に従って唸って笑うあなた
おゝ海よ あなたはストライキの夕方に海を見る
不確かで物思いに耽って夢を追いかけて
金色の脛に何色ものあなたの色彩が反射している
ストライキに漬かって眠そうな歌を真似て繰返して言え

涙になれ 動脈の中で脈打つ血液になれ
両眼を前にして深い神秘を全て映して見ろ
希望が生まれるように逃げて戻ってくる時
夕方の明るさの中で 足元に巻き戻るのは
あなたに永遠のものを生んでいる変わりやすい輪

その水の娘は自分を不貞と思った
何時もあなたは幽霊と同じであると見せてやれ

深い愛情にはゆっくりとした揺れがある
そしてあなたの波で 堪えきれない悲しみに溺れ
あなたの渦が描くのは巻きつかれた私たちの姿

(ポートランドのガブリエルのために 一九三〇年六月二四日)

雷雨

澄んで大変に優しそうな空は何処？ 見てご覧！
水平線の辺り一面では雷がごろごろ鳴っている
金色の総飾りを付けたぼろ切れが糸を垂らしたままだ
あなたの睫毛の下の鉛のように重い雷雨のことだ
その日はあなたの疲れたような魅力で暗くなる
美しい薔薇は大変果敢無く何時も脅され
突然の重苦しさと涙で溢れたような香気
若々しい夏は花々の虐殺を始めている

偉大な空が怒りの力を育てているのは
あなた？ それとも芽生えという大地の不思議が
もしもあなただったら 火矢の下で飛び跳ねるのは誰？
薔薇とは何？ 均整のとれた力を使って
神々の戦いである無限の遊びの中の私とは何？
放されたこれらの矢の飛翔を制止するのは誰？
天空よ おゝ善良なあなたの愛は豊かで
私たちの花々と果実の上では何時も雷が鳴っているの？

そして既に 閃光や雷鳴の爆弾のような音の上に
鳩たちが羽ばたきを響かせて大空に現れるのを私は見る
既に湿っぽく あなたの眼のように優しく澄んで
絹の睫毛のような光線の縁飾りは
翼の羽ばたく音の下に真っ青な濃い色を隠している

私はその魂の稲妻を認めた それは彼女だ！

(ポートランドのガブリエルのために 一九三〇年七月一日)

記念日

長い草のベッドで何て柔らかな眠りだろう！
そこでのあなたは突然に動き素晴らしく美しい声！
あなたは秘密の泉と眼に見えない水を
しなやかな葦に求めながら出掛ける
全てがゆったりとした寛衣のような緑の襷で眠る
風は歌い パニックになったようなフルートの演奏
官能的で頭がくらくらする忘却が干草を積み上げ
異教徒のよい香りが季節を祝福している

窪地の麝香の香りのする野薔薇が淫らに
服の紐を解き しつこいマメ科の草と結び合う
紫蘇科のマヨラナは夢見る その下でタイムの草が
私の溶けてしまった夢に野生の平和をもたらす

あなたが私に望むのは 苔の生えた洞窟のよい匂い
鹿毛色の暖かい毛皮 繊細に織られた洋服なの？
あなたは目覚めた牧神 血がみなぎった上半身
あなたは草の窪地から立ち上る極めて強烈な思い出に
強力な香気を混ぜ合わせたいのは何故なの？
鳥さえも活力がなく 私の心の下
赤い欲望よりもその矢は素早くはない

しかし全てが救われる 何故なら愛は勝つから
立ち上がっているのは決して狂った欲望ではなく
決して優しさを生んでいく興奮でもない
それと同じ心が恐るべき神に傷つき
この美しい場所である花々の上に眠りに来る
おゝ私の愛しい葦たちよ あなた方も同じなのだ！
あなたの望みは私の自我 私の水の精 私を愛するあなた

私はその日の夕方 これらの同じ畑の溝の上に
盲目の風が渦巻になって回るのを見過ぎていた

そこでは埃や翼のような藁が踊っていた
幸福と不幸で私たちの魂は混じり合っている
どんな深淵へ？……

この肉体が最高であるのを知ること
このしなやかな腰 大変に野蛮な拒絶と
大変に穏やかな奉納との優しい一致は
金色の埃と狂ったサラバンドでしかない！
おゝ私の小麦の藁よ 私は言った あなたは何処へ行くの？

しかしあなた自身は 余りに透明な氷の中で
全てのものが反射して輝くお気に入りの幸福にさえ
無関心な海賊や美徳のことを敢えて話すの？
大空の移り変わりに備える冷たい泉
そして真紅の時間と蜂蜜色になった時間と
薄暗い雲と祭日の明るさが
意味のない激しい嵐と単なる退屈を生んでいる

おゝ眼が青くて金色の頭は 自分を見るために時が過ぎ
氷の上に身がかがめることも知らないのだ！
あなたも過ごしたが 私の中にはあなたのイメージが宿り
虹色になった海流の下のその底のあの世では
葦が姿を曲げながら さざ波をよく立てている
あなたの美しい肉体の影が これらの水に映され
これからは記憶もなく それらの光景に混じり合う
そして忘れっぽいきらきらした光沢が変化するのは全て
あなたと似ていて あなたの両眼を描く
渦は全てがあなたの大切な肉体にぶつかるだろう
私が存在して自己を知ったのは変らないイメージの中
眼には見えないが存在するあなたが生まれる私の心の中

このようにしてこの襞の中に私が閉じ込めた香気は
私が愛したこの窪地の思い出とエッセンス
牧草地に息をする一頭の雌馬のように
あなたは跳ね 酔ったような激しい動きを感じ
性急な激しい欲望と名づけようのない恋

あなたが「いや」と言っても狂ってはいない
思い出しなさい.....

しかし泡と煙のこの遊びは
あなたに何時も同じ愛された姿を描いている
大空の嵐が最後には静かになる時
同じ大空が微笑し 同じ両眼が生まれている

おゝ不誠実で貞淑な自然よ それは同じものだ！
おゝ海よ 輝く空よ 透明な泉よ 私はあなたを愛する！

(ガブリエルへ 一九三〇年七月二八日ペシーにて)

香水

雉鳩のように瞬くあなたの瞳を私は愛する
翼の下に見えていた大空の青い色を私は愛する
興奮してあなたの喉が優しくくうくうと鳴り
私の愛しい優しいあなたは全てが私のためであると知っているの？
私がゆっくりと口づけする求めに応じたあなたの項
そして肩と私を誘惑するあなたの腕の窪み
そしてミルク入りの美味しい果実の匂いがするあなたは
大変に淡く清純な眠りに 秘められた熱情
甘い贈り物の愛撫に一輪の薔薇が混じり
焦げた草の匂いに少し眠くなっているのが分かる
そしてゆっくりと広がっていく水が元に戻るの
私たちの縛られた手足よりも柔らかくない結びを作り
半分眠ったようにあなたはその日の朝を延ばし
私たちの夢を混合させているのは快樂の時間

あゝ！ 夢想は甘美だ……

目覚めは苦い

この広大な隔たりとこの広大な海よ！

あなたは捕らえ難いものを再び見付けることが出来て
この薔薇の香水の中で私の存在は軽くなる！

(ガブリエルへ 一九三〇年八月五日)

ヴィーナスへ

緑色の大空に黄金の水滴のようなヴィーナス
蒼白いあなたは日が沈むと輝いている
赤い水蒸気や重く垂れた霧の純粋さを持つ
あなたは軽々とした雲でできたマントを投げる
神よ！ 思い出は心を目覚めさせ
あなたは再び夢を見て 私たちの愛が勝つのは
幸福なあなたの光による強烈なエーテルまで
そしてあなたは恋する夜の前奏曲の兆し

おゝ抱き合う幸せよ！ おゝ夕べの眩きよ！
二人の話に甘い沈黙が坐りに来る
多くを語る大きな瞳の沈黙よ！
そして酔い心地で演奏する所に薔薇が目覚め
ミルク味の果肉に燃える欲望の火のように
おゝ！ 好かれることもなく自分で楽しむ時間
全てがああなたの香気 あなたが全てであり
花は微笑し 鼻孔が吸っている花の息吹よ！
あなたの胸は私の掌の中で眠っている
穏やかな翌日のための思い出と約束
あなたの魅力的な口に高められていく僅かな空間は
純粋な処女であり そして既に恋人である

周囲の全てが納まり 世話を焼き 仕事をする
その影に新しい顔つきのデッサンが描かれる
愛は魂というものが呼吸しているようであるから
最も冷たい顔がああなたの微笑を真似ている
楽しそうに眩いている葉が揺れながら
私たちは風のようにゆっくりと揺れて行った
光る航跡を私たちの後に残しながら
海賊の私たちは押し潰した寒冷紗や影に酔う
ベッドから最高のものを略奪するために進んでいた
同じ息で巻かれた彼自身が

二重の肉体になるまで私たちを揺すり
同じ眠りと夢想の中に私たちを沈める

深い森の底の方にふいに立ち現れるあなた
あなたが見えなくなった正にその時にヴィーナスよ
もしもあなたが役に立たない夢を大洋に語る
砂漠の上で彷徨う者の姿を見たならば
彼に話してご覧 私たちの子供たちの喧嘩を見るあなた
勝ち誇ったような炎を私たちに照らすあなた
並木道の端に光を放って輝いていた
見知らぬ大地を知らせている灯台のように
今でもまだそれを愛していると上手く言え
私たちの愛というランプ そして私が有難うを言うのは
優しい淡い思い出 陽気で楽しかった年頃の時
あなたが私に運命づけたも同然の苦しみ
あなたのミルクのような項に金色の豊かな髪
全てが眠るや否や 私の裡に発芽が起こるヴィーナスよ

(ポートランドのガブリエルのために 一九三〇年八月二三日)

メーヌ地方の森から

おゝ湖よ！　もしも思考に何らかの力があつたなら
私は　日が暮れる時には湖岸にいるだろう
星たちが瞬いているのをあなたが見る時間に
ヴェールを引き裂いている優しいヴィーナスは
小枝を突き刺している真珠の身によって
動物のような液体の長い渦を濁らせている
霧が立ちこめて暑い時間の猛獣のような雲は
対照的に薄紫色した透明さを厚くしている
大きく開けたあなたの両眼には夕方の宝物
もしもその時ふいに現れた茂みの夢が
小道の間で彷徨う恋人たちのようであつたなら
殆どそれらを待つ肉体に触れるまで
ぼんやりしたイマージュを絡み合わせて作っていただろう
もしも曲がった虹の欲望がゆるんで
それ自らに反射した矢を感じていたなら
もしもその空しい泉の苦しみが溺れていたなら
もしもあふれる程の愛が大洋のように
虚無に逃げる長い溜息の代りに
永遠の波になって此岸から彼岸へ流れていたなら
そうだ　夕方の火の中や波の姿の中に
眼に見えないもので不安になっている行列を探して
光輝く惑星の下で影を突き刺して
多分輝やいているあなたの両眼を私は見るだろう
そして私の感じ易い波紋に震えているのはあなた自身
あなたは大きな森の半円形の丸天井の下で
私に似ている森の中の一人の人間として見ることになるだろう

(ガブリエルへ　一九三〇年九月六日)

秋の頃

大地は雲でできた外套を着ていた
その上には振りほどかれた縁飾りの断片が漂っていた
太陽は地平線の下の方へ沈んでいる
おゝ暖炉と燃えさしのクリスマスの季節よ来い
長い日の明かりは既に去っていた
そして月が髪を乱したように走っている夕べ
おゝ燃える私の夏よ あなたの噛み傷が沢山ある
私はあなたの厳しい明晰さを決して後悔せず
乱暴な亡霊をそんなにもきれいに描くこともなく
あなたの眠りはそんなにも短くなく 目覚めも早くなく
おゝ彫られた裸の神よ あなたの爪は嘲笑的で
顔の皺と心の中の皺よ！
大理石の姿に代って純粋な光線を守れ

物思いに耽り 日が短くなった日々の夕べに
私が失った時間で一番美しい思い出を集めながら
既に十月の赤褐色の葉は樹木の下に座っている

霧はぼんやりとした広がりの中で 私たちの魂が
拒む運命の支配する部分を溺れさせている
既に周囲を眠らせている寒そうな森の
曲がりくねった淡い線と厳かな丘を見よ
水蒸気のテーブルクロスが谷に広がる
風に飛ぶスカーフを通してヴィーナスが笑う……

かくして静謐で神秘的な水平線の上に
私は二つの星が昇るのを見るだろう

あなたの両眼だ

(ガブリエルへ 一九三〇年九月一〇日)

おゝ優しい秋よ！ 金色と真紅の混淆
あなたはヴェールを被った霧の中で光輝を生み
あなたの魂は何本もの小川のせせらぎのように眩く
夢見るあなたは美しい自分の姿を水に映して見る
夏の栄光は墓穴に向って再び降下して
一枚の葉が落ちるように一日一日が短くなる

.....

あなたが出発する時は春に向って昇っていった日
あなたは涙のプリズムを通して更にぼんやりしている
金粉と深遠な大空と輝いている幻影よ！
その悲しみが時々奇妙な魅力を放っている
それは魅惑し そして悪が殆ど善良になる
あなたは少なくとも不幸には誠実になる約束をした
危険な矢が突進するようなあなたは美しい
時間と空間を陶酔させているあなたは野性的だ
旅立ちという辛い衝撃があつてからの自由
しかし結局矢というものは何らかの処に入り込むのだ

残酷な夏の後には涙の秋が来た
どんな楽しみも狂ったように鳴る警報が付き
そして沢山の絶望と役に立たない歌が付いており
その時 斜めに傾いている夕日の光の下で
私たちの木立が黄色くなり 苦しみも穏やかになって
歌はより甘美になって愛らしい旋律が流れていた

回りのものが全て泣く時は泣くのが気持ちよい
霧は物の輪郭を濡れさせたように見える
厳しい横顔と大変に引締まった体の輪郭は何処？
全てが溶けて大地は芽ばえのために柔らかくなる
あなたは思いを凝らせ そして甘美な悪を宿せ

動物的な思い上がりの感情の動きを眠らせろ
瞑想してあなたを傷つけたものが分かるようになれ
哀れな魂よ 隠された思考を育てていけ

もしもあなたが自分しか愛さないのなら 何も愛していない
だから金色の頭の動きが大変遠くから
崇められた苦しみから息子たちを引き出すようにさせて
この痛々しい関係を感じながら考えてくれ
その苦しみは大変にあなたの近くにあつて悪を生む
それはあなた自身で 宿命に戻ることで
しっかり結びついたあなたのものがその姿でなければならず
同時にあなたは傷付けられた自分を知らねばならない

そんな風に心の神秘に従って
眠りに苦しむ私は幸福の金色になった

冬になってこれらに雪が積もる時
私は新しい薔薇の希望を知った
私の悲しい花束には緑色の葉が輝いていた
草や柏や鳥が皆お互いに愛した時
窪地の草が秘密の褥を作る時
口づけが全宇宙を知る口を溺れさせる時
沈黙のその時間に眠る者は蒼ざめている

ベッドのように暖かく恋人の影のなか
銀色の月は白い色調をひき立てていた
ナイチンゲールのあなたは枝の下で歌を響かせていた

(ボストンのガブリエルへ 一九三〇年一〇月二八日)

繊細な抒情詩

暖かな昼間に良い香りを放っている
ティーローズの色の時にあなたは私に強い関心を寄せた
夏の畑の溝をうろつきながら私に与えていた
金色の愛撫をあなたは遠ざけることができた

おゝ余りに速く　あなたが赤毛の睫毛を通して見るのは
雲がまばらに漂う遥かな大空の彼方よ！
大変に優しいあなたの微笑も既に遠くへ去り
前兆がかすめる頑なな額の上を乗り越えていた！

ミルクと血と不可思議な火を手に入れろ
あなたは美しい炎のように私の上に体をねじ曲げ
そしてあなたの魂を映し出していた
移り気の時間の恐るべき遊びに私は微笑していた

風に弄ばれる炎よ！　風よ！　金色の閃光のように
太陽の娘は別世界を明るく照らしている
そして崇められた拷問が続く長い夜に
私が探している人は腕を広げて　抱いて取り戻す
あなたは新しい魂にびっくりして微笑する

貪欲にこの優しさが続くことに身を投じて
あなたはもっと大切な人生を予感している
恰もあなたは私のものの中に幸福を認めたように
私の思考の中にもあなたがいることに気付いていた

(ガブリエルへ　一九三〇年一〇月三〇日)

『海辺の会談』への献辞

波の端やその優しそうに眩くような音と
同じような黄色の砂と逆流する波
絶壁の穴には烈しい衝撃の波
燃えるように輝いている夕空の閃光
眠っている海のうねりは薄紫色
金色の輪で縁取られた鉛色の雲
泡でできた細いリボンと黒い横顔のような岬
蒼白い霧と青い別の岬を発見しながら
波の上で踊るのは何時もの漁師
そして小島の彼方にマストが描くのは
波で曲がってゆったりとした飾り文字の署名
ロープは唸り 櫂は湿ったような音がする
大空のゴルフ場に現れたのは星であり
そして蜜蜂の色をした絹のような長い糸
翼のように瞬くあなたの睫毛に混じり
大変に年老いて見えたり若く見える新しい化粧の
この世の変ることのない黄昏も何時も忠実だった
私が野生のままの愛を刺繍している間に
巻かれた時間を追いながら走って行ったのは
あなたの大切な思いを自ら鏡で見るためだった

(ガブリエルへ 一九三一年二月二〇日)

抒情詩

「大空は泣き 薔薇の木は涙を撒き散らす
しかし 私は妄想を恐れて武器を捜す
私はあなたのことを考え 私の魂は大変に優しい両眼の中
幸福が私に勇気を与えて呉れることを私は願う」
かくして力はむき出しになって警報の音は震え
激しく揺れる私の心を両手で握り締めていた

濡れた花冠を通して視線は何処を見ているの？
旅行者は何処へ行くの？ 注意深いその眼で
眠っているイメージは何処で目覚めるの？
「暗礁の辛い端よりももっと遠く
錆びたような岩場や海藻よりももっと遠く
それは物思いに耽った夢想の浜辺に役立っている

短剣のように輝いて多くを反射させた上に
光る波頭の影になった穴に遡りながら
重々しい船が波の動きを高くしていた
遠くには希望のように航跡が逃げていく
水平線を見るあなたの視線は夢見る波を作るが
その下ではあなたの心は夜のように黒い

震える船体の上であなたの思考は何という足跡！
瀕死の人の苦痛に半分眠っているこの人は
あなたの夢の中で長い揺れに圧力を加えているようだ！
巨大な力や冷酷な広がり動きを
少なくとも海は穏やかについて行くことはなく
四季の足跡がゆっくりとあなたを誘惑している

おゝミルクのような柔らかな花 震える花冠
暖かな春の香気 愛撫 狂ったような抱擁
あなたは私の愛しい両眼 大空の二つの水滴は
震えている 深い湖には蜜蜂色の葦

あなたの睫毛は柔らかく透明になって眠そうだ
鳥の群のように掠めていく妖精アリエルの口づけよ！

年輪を重ねる柏に巻きつくキツタのように
あなたの腕は私の野性的な上半身と優しい関係
しっかりと付着し 小鳥の鳴き声がよく響く
しっかりとした幹の下で 震える水の囁きを聞き
岸辺のロープのようにあなたの腕は私を結び
押さえ切れない欲望で血管が震えていた

時間は私たちの中で眠り 愛は今でも
影や香りの上で夢見ていたが その時は
今朝の曙が鮮紅色の光で突然あなたを掠め
同じ曙でああなたの微笑を止めさせに来た時だ
私はあなたの伸ばした腕を見て 金色の夕べが
もう一つ別の太陽のように水平線に沈んだと信じていた」

かくして麻を織るようにその男は歌っていた
そして時間の流れに沿って賢明な波の前に
言葉が響き渡るおさ 箴さし を投げていた
男の周りは賢明で従順で優れた泣き虫たち
男は最早蒼白いヴェールの夕空の下で
星々に触れた水でできた山を見ただけだった

(ボストンのガブリエルへ 一九三一年五月一二日)

悲しみを見つめて

ご覧 あなたの広い大河と緑の木々の上を
永遠に続く夕べのように もっと蒼白い
世界中の色彩が広がって萎れていくのを見てご覧
大空は灰色の月を宙吊りにして置き
祖国から追われた愛する人のように優しくて遠い
暗い山並の稜線は幸せの影のように
曲線を描き 何時も変わらずに存在している
そして神が戻り 最後の別れを告げて
遮断した水平線の下の方へ落下した！
これらは全てが一つでしかなく 陰鬱で
動くことがなく 遠い存在でしかない
水は今も昔も流れていたし これからも流れる
広大な存在と原初への帰還
日々の繰り返しが眠りの循環を生み
私の王妃は最初の姿の儘で変わらず
眼に見えない鎖で自分を女囚人と思う
私は彼女のじっと見据えた視線を見る 大変素早いその動きは
凝結したかの如くで 私は彼女の額の黒い皺を見る
おゝ夕べよ 王妃があなたに語るのは落下する希望
そして鳩の喉が歌う歌を人々は知っている
「おゝ私の心よ あなたが私に約束したことは
敵の時間と空間に勝つことに関して
私は希望を鍛え上げ大変美しく見ていたの？
おゝ永遠の時間よ 私が愛したイマージュの
蒼白い月のあなたのように 何時も立ち去り
決して変わらないあなたを私は祝福しなければならないの？」

(ガブリエルのために 一九三一年六月一日)

ソネット

おゝ私の真珠 あなたは丸い月の下で眠り
柔らかな螺鈿の光と忘れられた殻は
ベッドのイーテルの中にあなた自身を閉じ込めて
あなたの繊細な金髪のエキスが漂っている

とどろく大洋の上の月と同じように
幸いにもはるか遠くあなたの腕の優美な皺を隠し
あなたの項の光沢のある象牙の下に眠って
秘密が一つ 波紋のように震えている

幸いにもあなたは自分の魅力の中に眠っている
あなたに大変に近く 恋人となってあなたの上に急いで
両手で作った杯の中には乳房の二つの果実

おゝあなたの目覚めの時を窺うには私はあなたになるしかなく
藁のように金色に光るあなたの髪を通して
あなたは曙の上に太陽の光の網を作る人になる！

(ガブリエルへ 一九三一年七月四日)

何故かをあなたは知っている

霧の水平線と緑色の丘
流れる水でできた穴 鹿毛色の背後は傾き
砂と草が掠め 大空を区切る海の
厳しい掟 そして小船も傾く
あるいは一つの分野に区切られた青い水兵
蒼白い緑色の海から再生した星
この広い世界がついにはあらゆる色彩になって
私の憂愁に満ちた夢をもう十分に齎すことはない

もしもストライキの眩きを私が最早理解しなかったなら
もしも現在のフーガが私に絡まり追ってきたなら
そしてもしも私が奥深い夜から目覚めて
大西洋の波をあなたの夕日が押し進めたなら
私は永遠の掟を引き寄せる 優しい音との
不思議な結合を 言葉を無くして思考する
もしも私の両手が甘美な遊びをすれば 私の背後で
音楽の翼が軽く首の上を触れるのを私は待つ
何故かをあなたは知っている

(『芸術二十講』の見本としてガブリエル・ランドルミのために 一九三一年七月一五日)

再び大峡谷へ眼を向けた私は
あなたが去っていった霧を見つめている

水平線で太陽を切っている糸は
海だろうか？ それは雲でしかなく
泡だらけの浜辺に描かれた金色の線に似ている
それは蒼白い海底の幻のような夢

そしてあなたは同じ夜に 浜辺で夢見ながら
たった一人で立ち 髪を風になびかせて
あなたは無関心な海の水平線の上に
眼に見えない大地の香気を待っている
蒼ざめた顔色の月が昇っていた
全てが沈黙し 眠り そして光沢のある鏡が
一番星から多くの星たちまでを映している.....

双子のような私たちの夢は帆を一杯にして乗り出す

私には白い亡霊のあなた 乳白色のこの霧から
あなたは生まれる 一条の光はあなたの髪を浮き出し
そして雲の上の大空の快い青い色彩は
あなたの視線になる この薔薇はあなたの優しい顔
真珠の螺鈿が鮑に巻きついて
水のように柔らかく回転するあなたはそれが全て
葉と薔薇色の花が優しくそっと触れるのは
大変に穏やかに落ち着いた私の首の上のあなたの手
横に出たその枝は耐えてお互いに差しのべ
輪になったそれらの腕はその瞬間を争っている
ヒソップの植物はあなたの息で焦げた香気がする
私が口づけするあなたの瑞々しい腕はマヨナラの植物
私の足の上に束ねられている葦はあなた
私を占領するのはダンサーのあなたの膝

あなたはブラウスのように更に慎み深く眩き
牧草も更に秘密の伝言に高められる……
そして私はこの大気に接吻し 彼女の口づけを受ける
こんな風にして私を静めてくれるこれらの花々の中で
私が距離を窺っている突き出た岩の上で
私は飛んでいる過去の思い出を掴んだと信じ
私だけの愛の中で自分を一瞬に抱き締める

そしてあなたは彼岸で 月光や波間の中に
反射する恋人を見ていたのだろうか？
あなたは月を背中にして大きな足跡を見ただろうか？
あなたは動じないで頑丈な顔を再び見つけて
多くの過ぎた冬が愛や快樂の襞とは別に
一つの皺をそのままに残して行くしかなかったのだ……

(ポートルランドのガブリエルへ 一九三一年九月一日)

砂丘は赤褐色になっていて岩はなく
ここには小さな壁と犁の刃の跡があり
その上方には帆船が波を耕す
海の青さに沿って収穫物の縁飾り
透明な水の源泉と苦々しい騒動
このようにして青空の中で優しく思考するあなたに
逆立てた緑色のうねりが突然に過ぎる
おゝ変わるものと変わらないもの　そして時々は陽気だ
まるで森を自ら映している幸福な入江のように
あるいは黒く透き通って沈黙した泉のように
森の動物は怯えて水を飲むのを止めている

そうではない　黒い泉はあなたの両手の中で澄み
見てご覧　道を通って来る夜は無く
あなたをぴったり映すものも無く　哀れな後足で立った動物
あなたに肉欲の夢も無く　余りに苦悩に忠実で
あなたの子孫は野生の血　又は曙の中で
眠っているような光線で　それはあなたの傷ついた魂に
狂ったように愛撫された金色の妄想
友よ　それが彼女であることは何もなく　何時もあなただ
それはあなただけの肉体で　あなただけの興奮
そうだ　千里以上の空気のプリズムの中で
青い靴下止めのマノン・レスコーを描き
白粉を塗って自分の姿を映し　鏡に笑って
彼女が抽斗に投げるのは皺くちやにした切符
何かから何まであなた自身の嘘と狂気よ！

友よ　きらきら光る鏡の中をもっとよく見よ
果てしない淡い大空が色の睫毛の下で開き
微笑する海の嵐はそこに眠り
過剰になった優しさの上で跳ねるのは純粹の誇り
上半身は身を投げ出して起こして貰い

そして悲しげに再び落下する伸びた柔らかな腕
思想家と欲望と望みが磁石によるように
眼に見えない一点に向って金の矢を放つ
遠くにある唯一の変わらない標的は
放された矢が増えて幸せに震えている
そして美しい膝の上に萎れて忘れられたのは
金色と何色もの色彩 一時しのぎの遊び
その間に地平線には白い月が昇っている

(ガブリエルのために 一九三一年九月三〇日 ペシーにて)

夜

おゝ美よ 今宵を照らす美しい夢は
多分あなたの枕元に私は座れず
口の上には静かなイメージと指の先
音は無く 溜息も無く 只触れるだけ！
それを見ることさえなく 曲がりくねった襖に
この亡命した女性は暖かいベッドの中で
蒼白い影が秘密の姿でぴったりと張り付く……
私は唯あなたが吐く息を聞き
何か奇妙なイメージをとどめていて
何かの思い出と結びつき そして溜息から
あなたの魂は戻り 新たに泉の底に集められる
その間に むき出しの空には放浪する月が
知識もなく私たちの時間と日にちを数えており
私たちの粘り強い愛には簡素な鏡
大洋の上に光る航跡の線が引かれ
一方から他方の浜辺に伝えられる私たちの伝言
浜辺のように静かで そして浜辺のように
大変に細かい光 浜辺のように眼に見えないのは
天体が衝突して振動している天空の溝
心の中の破滅に何度も小刻みに震えながら
私は安心してあなたの前に座っていた
私はあなたが望みであり 私は不安でいる
私はあなたが夢想であり 揺れる夢の中にいる
あなたの魂の欲望と殆どのあなたの思考は
結局は殆ど同じで 天国の空虚さの中で
あなたの両眼の奥にあるのは私のイメージ

(ルイーズ・ガブリエルのために 一九三二年一月五日)

『思想』のための献辞

実際にこの世の一瞬で信頼ある抱擁が
私たちを激しく抱き締める時は考えねばならないの？
羅針盤のように生き生きとして何も抑えるものが無い
絶対的な愛を極へ回す必然性は何時なの？

羅針盤で救助される最愛の思い出を
全て数えるために破滅を招く時を私たちに委ね
ダイヤモンドのように現実を切りながら
魂が自分を語る鏡に筋をつけたのは何時なの？

私は別の世界へ逃げたが　そこは冷たい色で
非現実的な平原の上に水晶になって描くのは
苦しみも消えた透明な形のもの

希望と許しと静かに澄んだ時間
あるいは今でも絶えず動く微光を放つ月光は
私たちの苦しみである蒼白く長い影を映している

(ルイーズ・ガブリエルのために　一九三二年二月二八日)

あなたのお祝いのために

おゝ私の幼い時よ！　あなたは波から湧き出る
何度も揺すって吹き上げられた　金色の麦藁
太陽に狂った夢よ！　自由を奪われた空のように
青ざめた微笑と　燃えているような口
ゆっくりと交替していく血液の曲がりくねった線
全ては私の春の愛と　滑らかなあなたの樹皮の中の
ざらざらとした樹液の風味　おゝ私の美しい低木よ
しなやかな風　小川に映して見る若い幹
あなたは地球の曲線の上を滑りながら戻る
わずかに開いた両膝の前にある籠の中
あなたの両腕と幸福は全てが一緒になる.....

全てが準備される　殆ど凍ることがない優しさ
煌めきもせず　並木道の砂が音を鳴らし
鶉が跳びはねる暗い大地をならしている
裸の樹木と黒い小枝が聳えて鳴り響き
刃のように切れる金色と銀色の空
小川は渦になって炎を走らせている
燃える両岸の間に蘇り這って進む者
青く遠のいていく間　遥か遠くの山の上に
澄んだ大気と岩場と死んだような姿の中で
戦っているのは冷たい太陽と蒼白い煙
あなたは冬にできあがった大きな薪の山と
裸になった大地と　皺の無い天空を感じているの？
処女そのものの人を　あなたが引き取るために
激しい香気を齎す葉の最後の炎が消えるのが分かるの？

水のように透明に裸になった春の上で
あなたは澄んだ泉になって新しい世界になった
現代の時間を照らすヴィーナスの火の下で
私が溜息をついて　あなたが泣いている間に
見てご覧！　愛する夕べに今でも輝く天体を

夕陽の上にいる同じように金色の星は
その光線に当たり その矢ははね返り
三日月になった月は 銀色の楯
おゝ変わることはない季節よ 忠実な月とあなた
愛の使者と 警戒を怠らない法律
自ら思考している別の私の魂を訪ねてくれ
何も過ぎず全てが再開すると言ってくれ

(ルイズ・ガブリエルへ 一九三二年三月一五日)

夢

.....そして あなたの心臓は砂浜で何時も脈打つ
おゝ海よ あなたは変わることなく不滅である
銀色の縁飾りは美しく その輝きは大変に純粹である
青い海の中のえにしだと 青い松の向うに
私は大きく広がった空にあなたの最初のイメージを見た
倍に明るくなった光で煌めいている深淵.....

そしてその次に この最良の日と呼ぶ如く
私はあなたの両眼に今でも別の空を見ていた
金色の岩の上の一番美しい春
何も気にしなかった幼年時代と礼拝の陶醉
裸の恋人は海流の眩きで踊り
小島を愛撫しているのは遠くの穏やかな波
降りてきている優しい夜と涙と微笑.....

そして もう一つの海の上には大きな船の影

(ガブリエルへ 一九三二年五月二五日)

六月の夢

獲物が風に吹かれて一息つく時間
あなたが見るのは黒い獵師と薔薇の根元の霧
彼の後につづき 姿を変えて抱き締め
そして背中には光があり 正面は影になって
あなたが休む不安定な避難小屋を迂回するのは誰？

それは彼のすばしこい足跡か？ あるいはあなたを動揺させる
血の波か？ あるいは愛撫しながら感じるのは
巻きつけた金色のあなたの腕の上の薔薇色の真珠か？
おゝあなたの考えに笑う私の眠る妖精よ
通りすがりに軽くあなたに触れる軽い一息か？

非常にゆっくりと揺する血液のリズムに
大変に優しく柔らかく抱締めるその愛に
夜のあなたの溜息のうちに昇っているのはどんな曙か？
欲望の隙を窺う獵師の黒い瞳の下で
幸福に向きを変えた彼女は既に貫通されている

悪賢い逃亡者と 怖くて逃げる者
あなたは偽りの噛み傷のある弓の射手に噛み付き
今は確信が欠如していることを危ぶみ
厳しい矢に期待し 当たれば燃えながら
柔らかな傷口に口づけするために突進する

(ガブリエルへ 一九三二年六月二五日)

夏の日

狂ったような草の中で眠る麦畑の端
すべてが金髪であるのを夢見て私は飛翔する
私は同じものに再会する　そして同じ地平線
赤い一輪の花が鹿毛色の毛並みの上で輝き
成熟した茎の間には優しい矢車菊が咲き
枝々の影の下で小径は見えなくなり
全てがそんな風に　同じ日影の穴の中の
あそこにあるのも同じ水と何本もの同じ葦
同じ空が同じ雷雨のために黒ずんでいるのは
雲よりも明るく遠くに立ちこもっている霧の上

傾いた柳の下で眠っていた思い出が
目覚めながら唸っている緑に色づいた一角では
昔からの泉が呟いているのを止めているのだ！
この反抗的な者に何という雷雨の騒がしさだろう！
最も狂った季節の中の頭蓋骨の下で
何という辛辣な夢　何という狂った季節だろう！
あなたの軽い幽霊を追跡するのは何という無駄だろう！
何という後悔だろう！　何という誓いだろう！
まんねんろうが混じる蒼白い牧草でふらふらする香気
そして峡谷から上ってくる水のざわめき
全てが大変虚しく華麗な英雄を目覚めさせ
草の上で体をねじ曲げ引き離された恋
森の中でまるで銃架で私を待ち伏せていたかのように
暗い茂みの中に昔からあった影と
この恐ろしい夏の赤い視線

全てが過ぎ　全てが戻る　無感覚な世界は
眠っている盆の上に沢山の夏を生んでいる
一人ならず偽りの影と狂った恋人は
青い花と金髪をした収穫物の小麦の中で
この世の遊びの全てに自分の不幸を読む

それ以上に幸せなのは私であり 私の心の中だけであり
私はあなたの全てを探す 愛は勝者のものである
見てご覧 葵の影の何もかもが美しい夏を！
そうだ 絶望しているあなた両眼さえも微笑する
鹿毛色のふさふさしたあなたの髪の毛と矢車菊の全てよ！
というのも私はあなたを愛し期待し あなたに腕を差し出し
大変に優しく口づけする愛の花を差し出し
青くなり 葉になり 薔薇色になる幽霊だから

(ガブリエルへ 一九三二年七月二三日 ペシーにて)

未来への思い出

私たちの地球の周りは今でも丸い何かで
冷えた天体で 上げ潮と引き潮を引きずって
光と愛と神秘をいっぱい広げて
私たちもいなくなる記憶のない世界

その時は四角い顔の海賊か何かで
蜂蜜の香りで全てが甘い九月で
金色の毛並みか何かが道に続いていて
瞬く睫毛の下には大空の色をした両眼

そこに見るのは奇跡的な青い祭
そこに戻ってくる海には波のうねり
かもめの飛行と 嵐の前兆と
そこにはきれいな船が直ぐに認められる

え何？ その心は大冒険を誘っている
そして網は解ける！ 理性も解ける！
そして帆は膨れ 帆柱は歌っている
そして脆い家は押し寄せる波に負ける！

知っていたのは金色の土地 暖たかい呼吸
そして幸せよりも更にもっと大切な喜び
最上の夜に匂う海の香気
蒼白い閃光の中で両腕を大きく広げた曙

やがて曙も武器の音 更に蒼白く乾き
両眼で拒絶している白い波が回る
申し分の無いさよならと 涙の無い後悔
折れた手足でぐらぐらしている苦悶

神の愛撫から翼の帰還まで
二つとない宝の上で再び両腕を閉じるまで

終わりの無い物語まで 甘く陶醉するまで
長い視線を金色のふさふさの髪に刺す

柏の木のキツタよりももっと上手に巻きつき
両腕で塔を造り 戦っているトルソーの上
柔らかな鎖を結びながら溜息をついて眠る
次の出発まで 何時か帰る日まで.....

そんな風に月の光は淡く その顔は変わり
永遠の昨日から 永遠の明日まで
何年も そして何歳になってもその間は
何時も眼に見えない道に戻ってくる

.....
或る夜 短い人生の全てを見た時
穏やかな海を前に 何もかも順調な時間に
彼らは無限の広がりを前に夢を見る
それが私たち二人である

しかし彼らには何も分からない

というのもそれは何時も光を放つ同じ曙
海水が映し出しているのも同じ夕陽
如何なる色彩の粒もその網の中になく
如何に長いうねりも忘れっぽい海に残されていない

(マンチェスターのガブリエルへ 一九三二年九月一五日 ペシーにて)

『教育についてのプロポ』のための献辞

色々な運命の色に染まった何年もの年が
毎月のように過ぎ去り 小作品の色を変える
忘却 幸福 後悔 変転が
それらの色彩を投げたのは毎日の日々の上
それらの気分の上 決然としている愚かさの上
それ自身に似ている娘たちである観念の上

枯れ果てた花卉は苦い味がするように
あなたが今蘇るのは冴えない香りの中
控え目な飛躍の中 落ち着かせた熱情の中
一つの夢から 一つの思考の味を覚えていた

(ガブリエルのために 一九三三年一月二三日)

アランとガブリエルの年譜

▼一八六八年（アラン・当歳、以下同じ）

三月三日、フランスのノルマンディー地方のモルターニュ・オ・ペルシュMortagne-au-Perche（オルヌ県l'Orne）で、獣医をしていた父エチエンヌ・シャルティエÉtienne Chartier（三二歳）、母ジュリエットJuliette（二三歳）の長男として生まれる。本名はエミール=オーギュスト・シャルティエÉmile-Auguste Chartier。一八六二年生まれの姉ルイーゼLouiseがいた。（彼女は生涯独身で、ペール・ラシェーズ墓地のアラン夫妻の墓に共に眠っている。）父エチエンヌは馬に関する知識に優れていて読書好きで、アランは多くの知識を学んだ。家庭は借金生活であった様だ。夫婦喧嘩が絶えず、アランは登校前に朝食を作ったという。

▼一八七四年（六歳）

モルターニュの小学校へ入学。「あらゆることを知っているが、彼以上の怠け者の児童はいない」と校長は言った。

▼一八八一年（十三歳）

アランソン高等中学校へ入学。クラスでの成績が一番良い。ラテン語よりもギリシャ語が得意だが、国語は良くなかった。ホメロス、プラトン、デカルト、バルザック、スタンダールを好んだ。

▼一八八六年（十八歳）～一八八九年（二一歳）

パリのヴァンヴ高等中学校へ転校し、ジュール・ラニョーの生徒になり哲学を学ぶ。何時も「ラニョーならどう考えるか」「ラニョーならどう言うか」ばかりだったアランは、大きな影響を受ける。高等師範学校へ二〇歳のとき受験するが、試験官でもあったラニョーが即興の答案を禁じたため、解答用紙の裏に詩の様なものを書き不合格となる。ラニョーは殆ど作品を書かなかったが、彼の死後にアランはラニョーに関する作品を発表する。

▼一八八八年（二〇歳）

十月二〇日、ウジェーヌ・モーリス・ランドルミEugène Maurice Landormyと産褥熱で死亡したオルタンズ・ゴーデンHortense Godenの娘であるガブリエルGabrielleとルネRenéeがパリで誕生する。この双子の姉妹は、ブルゴーニュの公立社会福祉施設で養育される。

▼一八八九年～一八九二年（二一歳～二四歳）

高等師範学校へ入学。素行が悪く、退学されそうになる。プラトン、アリストテレス、カント、スピノザ、ヴォルテール、モリエール、ラシーヌ、ラ・フォンテーヌ、ヘーゲルの作品に没頭する。ミシエルのリセでラニョーのクラスと同窓生であったポール・ランドルミPaul Landormy（ウジェーヌ・モーリスの弟）と再び一緒に成り、エリー・アレヴィーÉlie Halévyと一緒に親交を結ぶ。

▼一八九〇年（二二歳）

ランジャレイLanjalley夫妻の息子の家庭教師になる。

▼一八九二年（二四歳・ポンチヴィ時代）

哲学の教授資格者となり、ブルターニュ地方のポンチヴィで教師になる。クリトンの名で哲学雑誌に作品を発表する。

▼一八九三年（二五歳・ロリアン時代）

ブルターニュ地方のロリアンの教師となる。ドレフュス事件の時代となる。植民地政策を支持する集団にいたこともあるが、その後は共和制擁護の進歩主義者として「ロリアン新聞」に二四篇のプロポを投稿し、民衆大学を創設する。習作帖を毎日書く。

十月の新学期に、ロリアンのリセへ赴任したエミール・シャルティエは教室で偶然に若き日のマルセルMarcel（ウジェーヌ・モーリス・ランドルミとオルタンズ・ゴードンの長男）を見付ける。十月三日に父エチエンヌが死ぬ（五七歳）。

▼一八九四年（二六歳・政治活動時代）

ジュール・ラニョーが死ぬ（四三歳）。雑誌『形而上学と倫理学』へ「ジュール・ラニョーの断章注解」（一八九八年）「記憶について」（一八九九年）等を発表する。

▼一八九七年（二九歳）

ポール・ランドルミとマルト・プランソンMarthe Plançonの結婚。二人は甥と姪である。

▼一九〇〇年（三二歳・ルアン時代）

ノルマンディー地方のルアンの教師となる。ルアンの師範学校の理科の教師であったマリー・モニック・モール=ランブラン Marie Monique Morre-Lambelinと民衆大学で知り合う。その後一九〇三年に再会して、四〇年近い一九四一年に彼女が死ぬまでル・ヴェジネle Vésinetでアランの作品を整理する秘書と成る。

▼一九〇三年（三五歳・パリ時代）

パリのコンドルセ高等中学校の教師に転任。プロヴァンスProvence通り九〇番の二階に住む。民衆大学がモンマルトルで開催され、続いてイタリー広場で開催される。七月九日に「ルアン新聞」に〈日曜日のプロポ〉の一回目が掲載される。一九〇五年まで九二篇が掲載され、その後は〈月曜日のプロポ〉となり一九〇六年まで四二篇が掲載された。合計すると一三四篇で、政治、経済、教育関係のものが殆どであった。アランは、ランドルミの友人たちとはクロザン・モルガCrozon-Morgatで、ランジュアンの友人たちとはエーヌ県のペシーPaissyで、何時もバカンスを分けて過ごした。

▼一九〇四年（三六歳）

ジュネーブ哲学会議で発表する。会場でベルグソンと談話し支持者となる。

▼一九〇五年（三七歳）

三〇〇頁近い作品『一般的分析法』を九月十一日に焼き捨てる。「哲学は良くない仕事である。何故なら、物事の本質を注意深く凝視することが既に解らなくなるからであり、一種の代数学に帰せられ、曖昧な記号法で一杯になる」（『手帖』）。

▼一九〇六年（三八歳）

二月十六日に「ルアン新聞」に〈一ノルマンディー人のプロポ〉の一回目が載る。以後、一九一四年九月一日まで三〇八三篇のプロポが毎日続く。便箋二枚程度の原稿であったが、原稿料は無く無償の作業であった。何人かの新聞の読者が、それらのプロポの記事の切り抜きを保管していて、後の出版となる。十月にジュール・ラニョーも教えていたミシュレ高等中学校の教師となる。アランはランドリミ家族とフェニステール県のトレベロンTrébéronの小さな館に滞在する。

▼一九〇八年（四〇歳）

四月二日に『プロポ一〇一篇・第一集』ルアンのJ・ルセルフ書店から一五〇部出版。アランは、出版した本の著作権は全て出版社へ寄贈した。

▼一九〇九年（四一歳）

『プロポー〇一篇・第二集』（ヴォルフ社）一〇〇部出版。エーヌ県ペシーの田舎に小さな家を購入する。十月にアンリ四世高等中学校の教師になる。住所をプロヴァンス通りからサン・ジェルマン・デ・プレ界隈のレンヌRennes通り一四九番へ移す。アンリ四世高等中学校の受験準備学級を担当する。

▼一九一〇年（四二歳）

一〇月二六日にアランが面倒を見続けた母ジュリエットが死ぬ。

▼一九一一年（四三歳）

『プロポー〇一篇・第三集』（ルセル社）二〇〇部出版。

▼一九一一年～一九一三年（四三歳～四五歳）

ガブリエルがイギリスへ初めて旅行し、英語を身に付ける。

▼一九一四年（四六歳・兵役時代）

『プロポー〇一篇・第四集』（ヴォルフ社）出版。六月二八日にボスニアの首都サラエヴォでオーストリアの皇位継承者が銃撃・暗殺される。八月三日にドイツがフランスへ宣戦。八月四日徴募へ行く。「一番の可能事とは、（屁理屈を軽蔑しよう）明らかに武器を取ることである。私が兵役志願をした理由である」（「ルアン新聞」）。八月二七日にエーヌ県のジョワニーへ出発する。重砲兵第三連隊・第五砲配属。「一九一四年十月から一九一七年十月まで戦争に加わった。そのうち約二年半は九五砲兵中隊の砲兵として務め、そして六ヶ月間はきつくない仕事（気象観測班）を行っていた」（『幸福論』）。

双子の姉妹のガブリエルとルネは、エディット・ワルトンEdith Whartonが女性たちを雇ってパリに創った服飾の仕事場で働くが、彼女らは人間関係の行き違いや商店の廃業で財産を失っていた。

▼一九一四年～一九一七年（四六歳～四九歳）

戦線で砲兵だったアランは、最初の作品を書いてM・M・モール=ランブランへ手紙で送る。

▼一九一七年（四九歳）

十月十四日に復員。パリ西郊のル・ヴェジネに小さな家を購入し、以後死ぬまでこの地に生活する。モーリス・ベルトー通り七五番（現在はエミール・チボー通り七五番）。「ル・ヴェジネ、私が花々や小鳥たちと共に生活するこの田園。……ル・ヴェジネの私の修道院」（一九三五年十二月一日のマリー・モール・ランブランへの献辞）。兵役中の一九一六年春から書いた『精神と情熱に関する八十一章』をカミイユ・ブロック書店から出版。（後に『哲学概論』としてガリマール書店から増補版が一九四一年に出版）

▼一九一九年（五一歳）

ルネ・ランドルミが死亡する。ガブリエルは生活が苦しく、エディット・ワルトンの店に住み込む。

▼一九二〇年（五二歳）

『芸術論集』をフランス新評論社（NRF）から出版。『アランのプロポ』全二巻（第一巻は一七七篇・第二巻は一七八篇）をNRFから出版。

▼一九二一年（五三歳）

『マルス、又は戦争批判』（NRF）出版。

▼一九二三年（五五歳）

『美学に就いてのプロポ』（ストック書店）出版。

▼一九二三年～一九二六年（五五歳～五八歳）

ガブリエルの姿を見ることができたレンヌ通りのアパルトマンと、ル・ヴェジネの家を共有する。M・M・モール＝ランブランが相談するモンドール博士Dr Mondorは、アランとの会見をとりつける。ガブリエルがモリヌーMolyneux社の女性のコレクション部長に成る。

▼一九二四年（五六歳）

『心と精神に就いてアンリ・モンドールにあてた手紙』をNRFから非売限定版として五三部出版。『キリスト教に就いてのプロポ』（リーデル書店）出版。

▼一九二五年（五七歳）

『幸福に就いてのプロポ』（邦訳・幸福論）をニームのジョー・ファーブル社から五六〇部限定出版（全て番号入り）。『ジュール・ラニョーに関する思い出』（NRF）出版。『急進主義の要素』（NRF）出版。『ジャンヌ・ダルク』をニームのジョー・ファーブル社から二七三部限定出版。

▼一九二六年（五八歳）

『権力に抗する市民』をジャン・プレボーの序入りで出版。『情操と情熱と意思表示』（マルセル・ルサージュ書店）出版。

▼一九二七年（五九歳）

「デカルト論」を『方法序説』の序としてジョルジュ・セルスタン・クレス書店から出版。『思想と年齢』全二巻をNRFから出版。「家族感情」「人間素描」「音楽家訪問」を発表。モンドールがアランとヴァレリーを引き合わせる。

▼一九二八年（六〇歳）

『プラトンに就いての十一章』（アルトマン書店）出版。「デカルト論」がアンリ・ジョンキエール・エ・シイ書店〈知性叢書〉の『情念論』の巻頭に付せられる。『プロポー〇一篇・第五集』（マルセル・ルサージュ書店）一一〇〇部出版。「時代は変わった。〈プロポ〉も変わった。文学の領域は、作家と書店と大衆の状態によって決定される。私はジャーナリストであったが、今は最早そうではない」（一九二九年一月一日のマリー・モール・ランブランへの献辞）。ガブリエルがアメリカ合衆国（ボストン）へ行くイクソンHickson服飾店との契約にサインする。

▼一九二九年（六一歳）

『アランの注釈によるポール・ヴァレリー詩集〈魅惑〉』（ガリマール書店）一一八〇部出版。四月初めにガブリエルがアメリカへ出発する。アランは夏の間、モルビアン県のプールデュPoulduで『海辺の対話』を書く。

▼一九三一年（六三歳）

『海辺の対話』（NRF）二七〇五部出版。

一九三〇年十二月から一九三一年四月までガブリエルはフランスに滞在する。アランは『大戦の思い出』を書く。

▼一九三二年（六四歳）

『教育に就いてのプロポ』（リーデル書店）出版。

▼一九三三年（六五歳）

定年で高等中学校の教師を退職する。『文学論集』（アルトマン書店）出版。

二月～四月、ガブリエルはフランスのパリと、フィニステール県のモルガMorgatに滞在する。彼女は四月二三日にラファイエットle Lafayette号で再び出発する。

七月に、退職したアランは夏の間プールデュで『神々』を書く。十月～十一月、アランは「突然の烈しい痛み」の病気になり、ガブリエルも入院する。大変な危機。

▼一九三四年（六六歳）

『神々』（N R F）五八八五部出版。『政治論集』（リーデル書店）出版。

▼一九三四年～一九三五年（六六歳～六七歳）

ガブリエルはボストンで働く。アランは『わが思索のあと』を書く。

▼一九三五年（六七歳）

『バルザックを読みつつ』（マルチネ研究社）出版。『スタンダール』（リーデル書店）出版。

「私はバルザックに晴朗さ以上のものを見出していた。そして、第一級の作家に彼を入れることで最後を締め括った。しかし、私はスタンダールが好きだ」（一九三五年五月二二日のマリー・モール・ランブランへの献辞）

『経済論集』（N R F）出版。

▼一九三六年（六八歳）

『アランの注釈によるポール・ヴァレリー詩集〈若きパルク〉』（N R F）一一八〇部出版。『わが思索のあと』（N R F）出版。

二月に、ガブリエルがパリのヴォジラールVaugirard通り八九番地に滞在する。

▼一九三七年（六九歳）

『大戦の思い出』（アルトマン書店）出版。『彫刻家との対話』（アルトマン書店）出版。『精神の季節』（N R F）出版。「アランが自ら立ち上がる困難な戦いを受入れる」（一二月二七日の新聞の冒頭）。

▼一九三八年（七〇歳）

『宗教に就いてのプロポ』（リーデル書店）出版。

▼一九三九年（七一歳）

『ミネルヴァ、又は知恵について』（アルトマン書店）出版。『マルス続編—暴力の痙攣』二巻（N R F）出版。「私はこれらの〈プロポ〉を『マルス、又は戦争批判』の続編としてよりも、むしろ『大戦の思い出』の続編と見做している。それらは戦争の非難をするものでもなく、戦争を物語るものでもない。戦争を行う者は、もっと始末の悪いものを沢山見出すことになる」（一九三九年五月三日のマリー・モール・ランブランへの献辞）。『マルス続編—暴力の阻止』（N R F）出版。『美学序説』（N R F）出版。

九月三日、第二次世界大戦の宣戦布告。

九月二四日、ガブリエルが車椅子の上で動けないアランをプールデュに会いに来て、アメリカへ戻る前にM・M・モール=ランブランと語り合う。

▼一九三九年～一九四〇年（七一歳～七二歳）

アランはリユーマチの酷い悪化で、パリの南西の郊外にあるヴィル・ダブレイVille d'Avrayの診療所に滞在する。

▼一九四一年（七三歳）

一〇月、生活を共にしてきたル・ヴェジネのM・M・モール=ランブランが死亡する。

▼一九四二年（七四歳）

『精神の不審番』（NRF）出版。『神話序説』（アルトマン書店）出版。『盲人のための哲学史概論』（アルトマン書店）出版（一九一七年に執筆し、点字で刊行したもの）。

▼一九四二年～一九四四年（七四歳～七六歳）

ル・ヴェジネにいるアランを、M・M・モール=ランブランの妹テストTeste夫人が看護し、サヴァンSavin、ブーシェBouchéが面倒を見て、サロモンSalomonや生徒や友人たちが訪れる。ガブリエルはアメリカで赤十字社と契約する。

▼一九四五年（七七歳）

『心の冒険』（アルトマン書店）出版。『ディケンズを読みながら』（NRF）出版。

ジュアンJuin將軍の軍に入ったガブリエル・ランドルミは、イタリアの平原を逃げ、解放軍とともにアランの処に戻る。

十二月二七日、ル・ヴェジネでアランとガブリエルの結婚。

▼一九四六年（七八歳）

『人間さまざま』（メリディアン社）出版。『カントの哲学に就いてセルジオ・ソルミに宛てた書簡集』（アルトマン書店）出版。

▼一九五〇年（八二歳）

七月から九月にブルターニュのモルガートに夫妻で最後の滞在。

▼一九五一年（八三歳）

五月十日にアンドレ・モーロアの立ち会いのもと、文学国民大賞を自宅のベッドで受ける。

六月二日に妻や親友たちに看取られながら、真夜中の十二時前にル・ヴェジネの自宅で亡くなる。

六月六日にパリのパール・ラシェーズ墓地に埋葬される。

▼一九六九年

ブルターニュのシェーブル岬le Cap de la Chèvreにある「ドゥアール・アン・ナベルDouar an Avel」の家でガブリエルが亡くなる。

〈アランの死後に出版された作品〉

『政治』（NRF）一九五二年。『一ノルマンディー人のプロポ I-V』（ガリマール書店）一九五二年～一九六〇年。『定義集』（NRF）一九五三年。『第一哲学に関する手紙』一九五五年。

『喜劇二十一景』（アルトマン書店）一九五五年。『プロポ集 I（モーリス・サヴァン編）』

（ガリマール書店のプレイヤード叢書）一九五六年。『壺王』一九五九年。『ロリアン手帖』

一九六四年。『エチュード』（ガリマール書店の思想双書）一九六八年。『プロポ集 II（サミュエル・S・ド・サシー編）』

（ガリマール書店のプレイヤード叢書）一九七〇年。『神話と寓話』

（アラン研究所）一九八五年。『文明国家が戦争を起こす本当の理由になっている人々』（アラン研究所）一九八八年。『プロポ全集』全一〇巻（アラン研究所）一九九〇年～二〇〇一年。

『ガブリエル詩集』（アラン研究所）二〇〇一年。『自然についてのプロポ（ロベール・ブルニユ編）』

（ガリマール書店）二〇〇三年。

（この年譜は、プレイヤード叢書『プロポ集Ⅰ（モーリス・サヴァン編）』及び『ガブリエル詩集』（アラン研究所）の「伝記に関する指標」を底本にして訳者が作成した。）

この訳詩集はAlain, Poèmes à Gabrielle, Institut Alain, Le Vésinet (2001)の全訳です。哲学者アランが創作した詩は、我が国では殆ど紹介されることがありませんでした。フランス本国でも、アラン没後五十年を記念して出版された七三篇から成る本詩集が、本格的にアランの詩の全貌が公表された最初だと思います。それまでは医者でありアカデミーフランセーズ会員でもあるアンリ・モンドール博士が『アラン』(Henri Mondor, ALAIN, Gallimard, 1953)の中で四編の詩を紹介しているくらいでした。因みに、その四編の詩とは、「デカルトへ」「ガブリエルへ」「ガブリエルの『魅惑』について」「何故かをあなたは知っている」です。二十歳も年下の女性で、やがて一九二九年四月にアメリカ合衆国へ渡ることになるガブリエル・ランドルミのために書かれたこれらの詩篇は、アランの私的な作品として生前に公表されることはありませんでした。我が国のアランの受容についても、アランが創作した詩のことは全くの空白状態であったと言っても過言ではありません。アランの邦訳書の嚆矢が、一九三三年(昭和八年)に作品社から刊行された桑原武夫訳の『散文論』であったのは象徴的で、アランといえは散文作品のみに限定されていました。

本詩集を編纂したロベール・ブルニュ氏が言う様にアランにとって詩は、「言葉という織物が生活の印を付け、感情の歩みを止めさせて、実体の無い夢想の活動が感情を傷つけるのに対して、詩は秘密と唯一のものと独りのためであることを取り戻す」ものでした。更に、「不在と別離のものであるこの詩篇は、愛の救いを生む」ことになり、アランは詩を全く個人的にガブリエルのためだけに秘密に書いていたのです。従ってアラン自身も「これらの詩篇は、私は秘密の詩集と呼んでいるものです(五十年後には注釈者たちを驚かすことになると思います。私が栄光を疑っていないことにあなたは気付きます!)」と一九二九年十月十五日にガブリエルのために書いています。

ガブリエルがフランスに戻ったのは一九四五年ですが、同年十二月に七七歳のアランと結婚します。アランにとっては初婚でした。ガブリエルは、それまでに何度かフランスに帰国した折に病気(リ्यूマチ)になって動けなくなった車椅子のアランを見舞ったり、一九〇三年から一九四一年まで四十年近くアランの原稿を整理して生活を共にしてきた秘書のマリー・モニック・モール=ランブランと、推測すればアランのことについて語り合ったりしています。恐らく、病気であげなくなったアランを世話するための結婚だった様に思います。アランは刊行した本の著作権は全て出版社へ寄贈していましたから、一九五一年六月二日のアランの死後、一九六九年にブルターニュの施設で亡くなるまでのガブリエルの生活は質素だった様です。まさに『ガブリエル詩集』は、アランがガブリエルへ捧げた愛の詩集であり、ガブリエルの後半生の生活はそれに応えたものでもありました。

「これらの詩篇を読み、そして再読する人は、肉体が忘れていたものやそれ自身の貞節さを再発見して、この世に齎される人間の魂の救いを垣間見ることが出来るだろう。他人の肉体は基礎的な能力として優れた美しい姿をしていても、愛に触れると私たちに絶えず齎され、突然に掻き立てられるものです。そして、ここには本詩集という樹木全体が精神で震え、根は頂の衝撃を受けています。古代ローマの伝説上の貞女クレティアは神話によく登場しますが、アランが自分自身だけにしか使わなかった靈感を恰もヴァレリーもよく使っているかの様です」とロベール・ブ

ルニユ氏は、アランが優れた詩人であったことにも言及しています。

この世には二種類の間がいます。詩人という人間と、詩人で無い人間です。詩人が語る言葉は本質しか表しませんから、現実的ではなく実際にこの世のものではないのかも知れません。そして、その言葉を理解出来るのも詩人でなければなりません。しかし、その様な言葉は詩人で無い人間には退屈に映ります。この世に三角形は何処にも存在しない様に（現実のこの世の三角形の辺は、厳密には曲がっていて決して直線ではありません。）、詩の言葉も現実的でないのかも知れませんが、実際の人間の理解や思考や判断の助けになることも多く経験できる筈です。『ガブリエル詩集』は、アランとガブリエルを結びつけ、二人を孤独の悲惨から救出しました。その時のアランとガブリエルは詩人でした。アランとガブリエルと詩という愛の三角形は永遠に光り輝く曙の星になり、私たちにも実際に見える様になりました。この訳詩集をお読みになる人も、アランとガブリエルの愛に触れてその現実の美しさを理解する詩人という人間になって戴ければ、訳者としては望外の喜びです。そして、我が国では殆ど知られることがなかったアランの本当の感情を基礎にして書かれた本詩集を通して、多くの優れた散文作品にも是非眼を通して戴きたいと思います。何故ならアランの真に急進的な思想を理解することは、現代の我が国が最も必要としている一人ひとりの思考する精神にとって、最良の糧の一つに成るものと私は確信しているからです。

最後に、本誌集との個人的な出会いについて申し添えたいと思います。私が本詩集を初めて入手したのは、二〇〇六年六月に妻と二人でパリへ行った時でした。リセの教授ジャン・ルイ・シッフフェール氏に案内されてパリ十一区のビュロー通りにあるアラン研究所を訪問した時に、所長のロベール・ブルニユ氏から直接購入したアラン作品のうちの一冊でした。アランが詩らしいものを書いていたことは従前から知っていましたが、七三篇もの詩作品群を実際に手にした時、私は詩を翻訳する困難性を直感して、とても訳せないだろうと思い尻込みしていました。しかし帰国後暫くして、詩集の表紙になっているガブリエルを撮した神秘的で理知的な小さな顔写真に魅せられて読み出してみると、びっくりして仕舞いました。アランのガブリエルへの思いが堪らなく新鮮な詩句になって鏤められています。それらが美しい曙の空の様に映り広がって行きました。そこには、今まで我が国が受容してきたアランとは全く別人のアランがいる様に見えました。その時から九年程前の一九九七年に、私は「詩人アラン」という評論を書いて賞を頂戴したことがあります。その中で私は、アランの詩作品群の存在を予感していました。まさに予見した〈詩人アラン〉が現実のものであったことが証明されて驚嘆し、胸が熱くなりました。私はこの時の本詩集との出会いを、今でも昨日のこの様に鮮明に思い出しております。本当に私にとっては奇跡の様な出来事だったので。

なお、表紙の写真は北海道・美幌（びほろ）峠から見た屈斜路湖と中島です。妻と二人で行った二〇一七年六月三十日に撮影しました。

二〇一七年七月七日

東京西郊・たまプラーザの寓居にて訳者記す

ガブリエル詩集（下）

<http://p.booklog.jp/book/115813>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/115813>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト